特38
290
[illegible]16261
東京圖書館藏

松浦琴生著

地理風水萬病根切窮理

信陽 生々館藏梓

地理風水萬病根切窮理自叙

[illegible]く日月顕あり陰陽循環して寒暑[illegible]を通して風水順逆行り中る人[illegible]玉ふハ住家の精造千差萬別にして[illegible]陰陽の表裏又ハ風水の正道あるまゝより[illegible]依て萬病の根元を發するを考し此故に古へより家相方位家其吉凶を辨し五山六殺と云ひ暗鈎殺歳破五黄命本命的殺月破又ハ金神其の大山殺杯と論ずる者多し然と雖も風水の理ニ至ては其理ハ[illegible]より人[illegible]

[illegible]

發病の根元及び全治する方法を辨ずる者古今未た其例あらざる所なり予こゝに發見し數年來風水の順逆によりて萬病發端の根元及び又全治の理由を極め是によりて實地に經驗し無量の病を患ふる者家相による方法に依りて風水を順理に改移し全治せしめたる數以上に及びしかるを爰に風水の大道を論し地理風水萬病根切究理の書二巻を記して君子に希くは無量の病者道を修して地相自然の正理に随ふ時は物皆吉慶にして凶災なく四民其業を安ふし國家長久の基なり

明治廿一年一月　松浦琴生識

地理風水萬病根切窮理　乾之巻

目次

一 地宅人躰符合の論　同畨
一 巽前通氣　同図　一 乾後通氣　同図
一 震前通氣　同図　一 兌後通氣　同図
一 離前通氣　同畨　一 坎後通氣　同図
一 坤前通氣　同図　一 艮後通氣　同図
一 八宅明鏡墨字凶所の説
一 水火通氣の論　一 五行相生相剋
一 九星法　一 中八方

一 十干十二支　一 寒帯熱帯
一 順逆通論
一 耶蘇教師ニ對し万病発の問答
一 窮理磁石臺

目次畢

地理風水萬病根切窮理　乾之巻

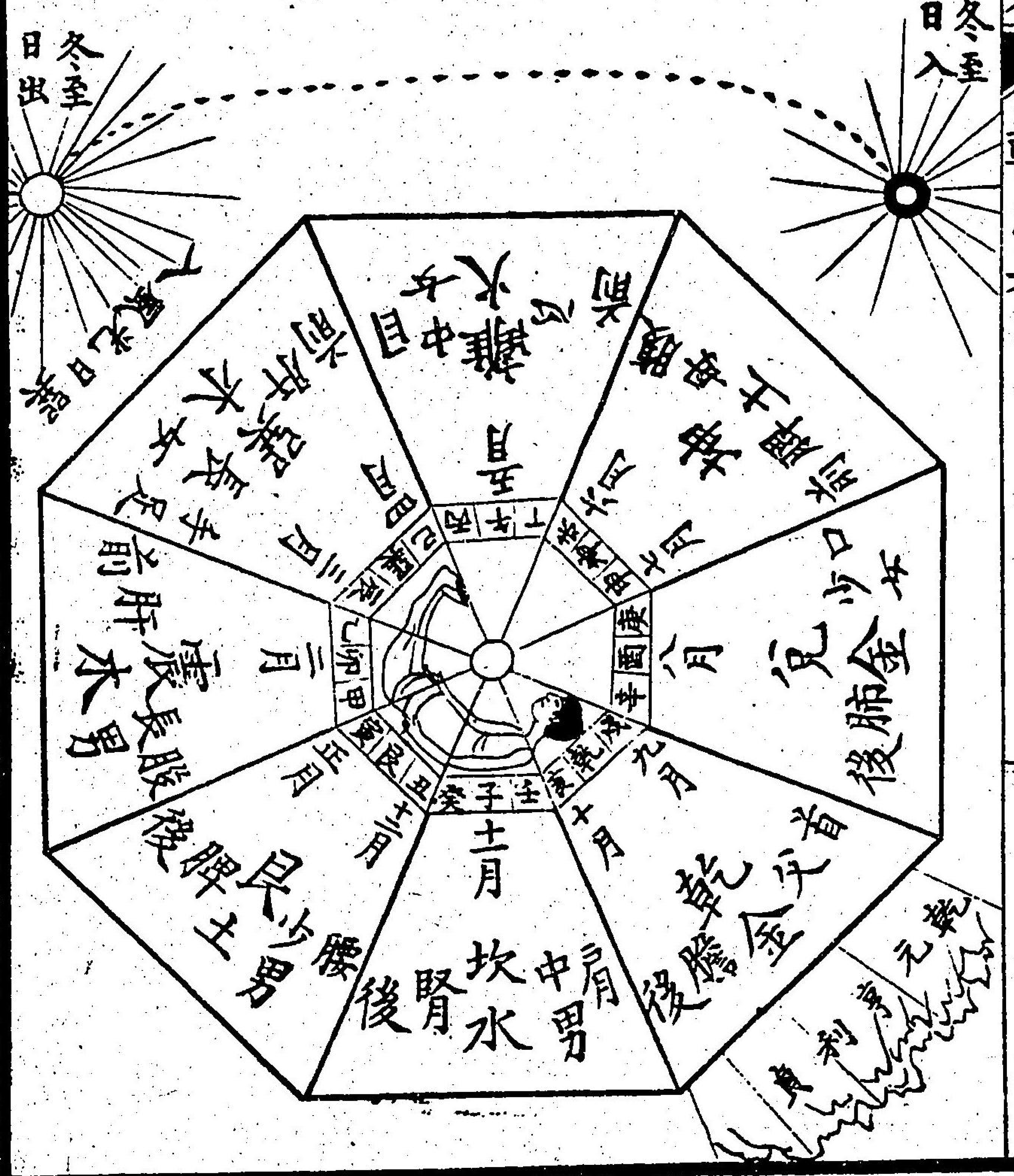
信陽　松浦琴生著

地宅人躰符合之論

夫神道ニても人ハ天下の靈物なり天地神と同根なり万物の靈と同躰なりとなり又易の説卦傳ニ乾ヲ為首坤ヲ為腹ト云其他震ヲ為股巽ヲ為手足坎ヲ為耳離ヲ為目艮ヲ為腰兌ヲ為口五臟ニ取りてハ乾を膽とし坤を胸及ひ脾胃の臟とし坎を腎の臟とし艮を下脾胃の臟とし離を心の臟とし兌を肺の臟とし震巽を肝の臟とす又人躰前後ニ於てハ乾兌艮坎を後とし震

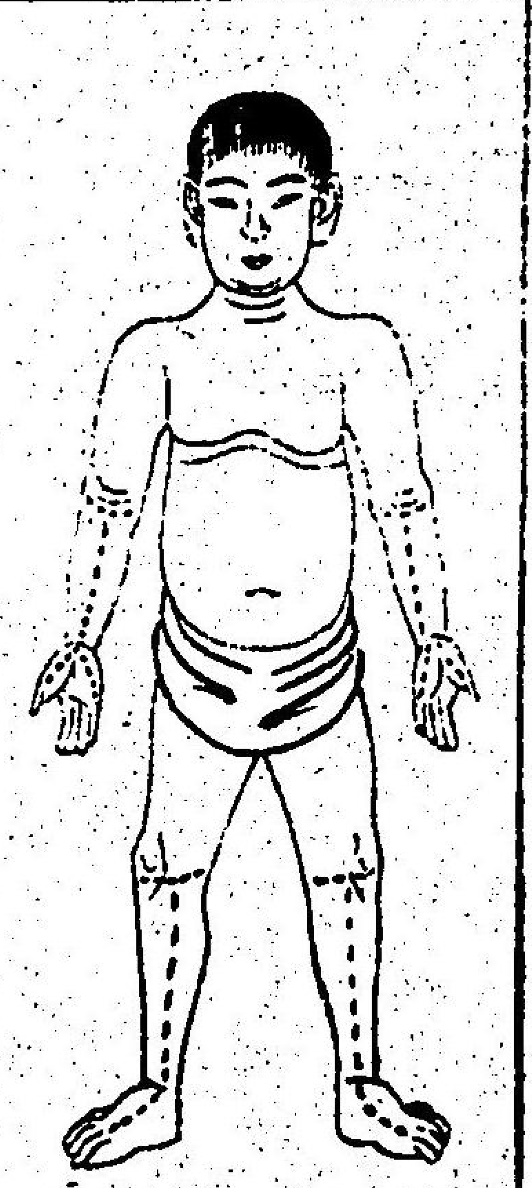
巽、離、坤を前とす男女ニ取てハ乾を父とし坤を母とし艮を少男とし離を中女とし坎を中男とし震を長男とし巽を長女とし兌を少女とす又乾兌を金とし坤艮中を土とし離を火とし坎を水とし震巽を木とす此の如く地宅人躰符合して同躰なる事ハ和漢共古今同一の論なり然るニ當今開明の世ニ至りてハ古への聖人も未だ究めざるの理あり電気の通ずる比ひ寒暑晴雨又ハ地宅人躰ニ陰陽開闔の気の通ずる如き四季の気候ハ世ニ生ある物感知せざる事なし増て人身ニ於て感ぜざるの謂なし茲ニ首の方ニ火気を備へ腰の方ニ水気の備へ有れバ此逆気人躰ニ通じ終ニ疾病の根元を発す是を轉じて又首の方ニ水を備へ腰の方ニ火を備へ置ときハ頭寒足熱法ニ叶ひ人身強壮ニして発病する事なし是地宅人躰ニ符合するハ天地自然の順理あり予が数年地理風水の道を研究し夥多の経験ニ依て究理せし処ニして其水火の順逆ニより万病の発端并ニ全治の法ハ委しく條を別つて左ニ記す

地宅人幹符合之圖



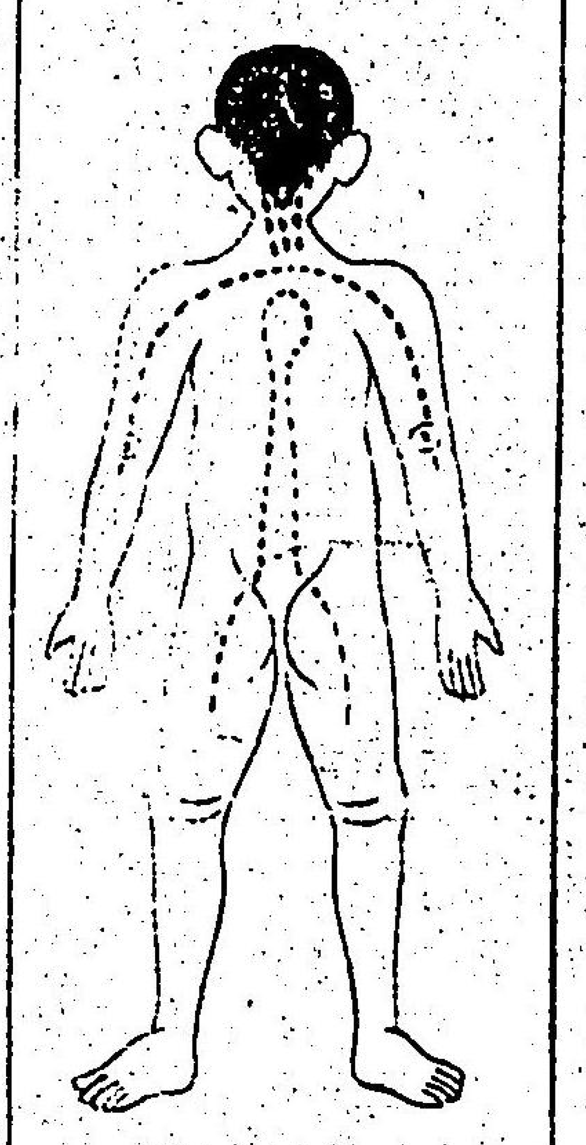
巽前通氣

巽を手足の先と爲し辰巳の方に不浄物の備へあればバ手足に障り且つ肝臓に熱気通じて痛むなり辰の方に腐敗せる木ありて地に附くときハ向ふて左りの手足痛ミ巳の方に有れバ右に通じて点の如く手足指先迄煩ひ且つ年久しく腐敗木を地に付け置ハ左右の手足共に腫物を発するなり家廻りなどに積置く木の類ハ何れも石の臺にして腐れざるやうせバ障なきものなり



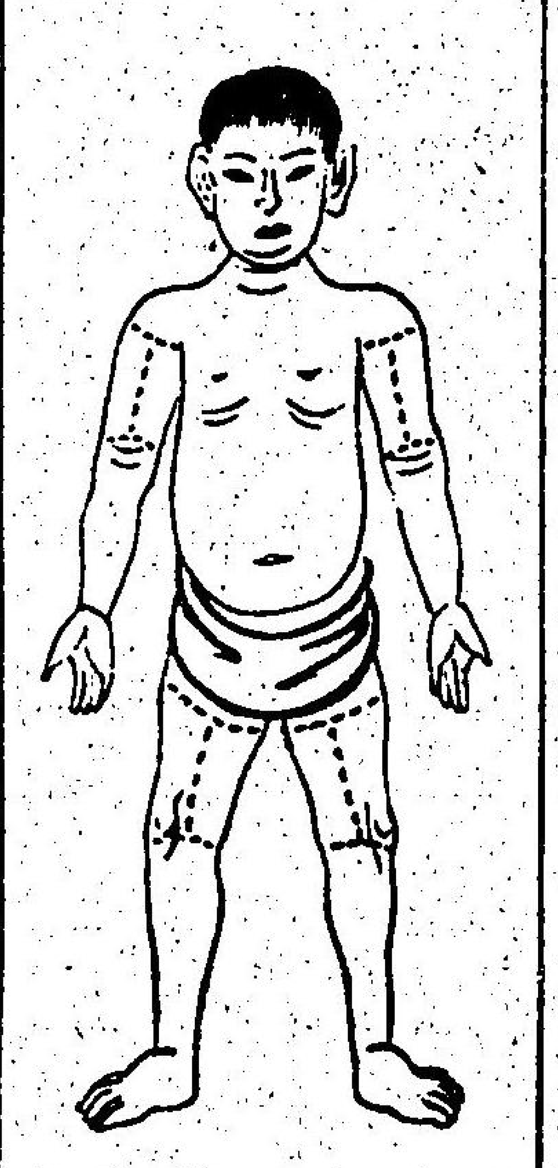
乾後通氣

乾を首とし膽の腑とす戌亥の方に大竈戸に竈戸炬燵抔築立されバ此火氣膽の腑へ後より通し真頭痛眩暈し点の如く煩ふ事甚し陽道の節冬至より夏至に向ひ五月中節迄ハ頭上へ昇り陰道は氣候に至り夏至よりハ下りて淋病消渇を煩ふ戌の方に火氣備有れハ右片頭痛と成亥の方に於て土中に築きされバ左りに通して左片頭痛と成りて煩ふなり



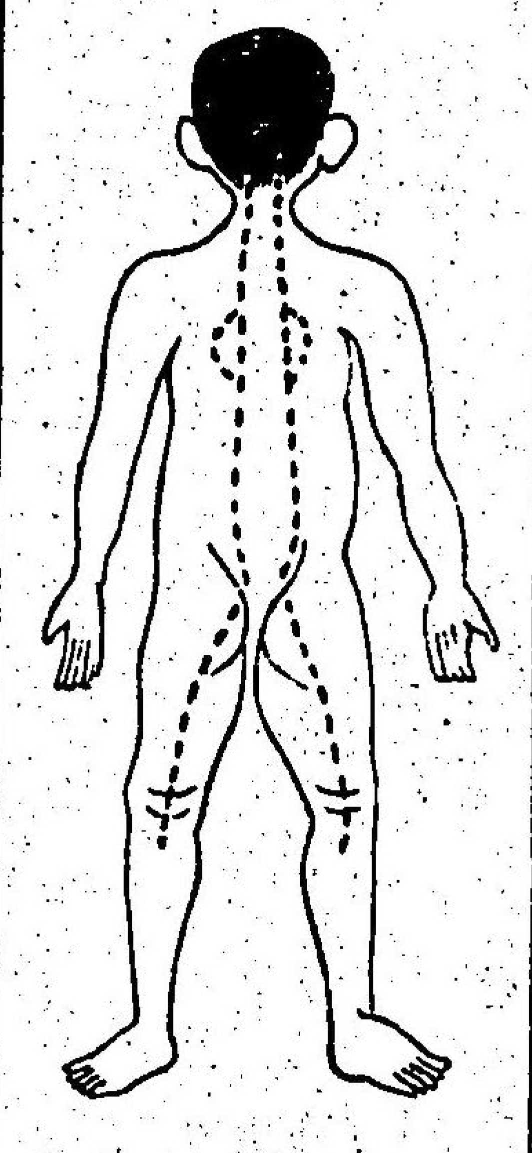
震前通氣

震を股とし腕とし又肝の臓とす卯の正當に不浄物或ハ腐敗木など備されハ股腕痛ミ終にハ腫物を發し脚氣を煩ふ又手足の節喘々と鳴もされ少し甲に寄れバ左りに乙り寄れバ右に通して点の如く股腕痛ミ第一樹木の腐れ物されバ障り甚しき処なり能々瓦片討石の臺に積置て障りなきやうすべし



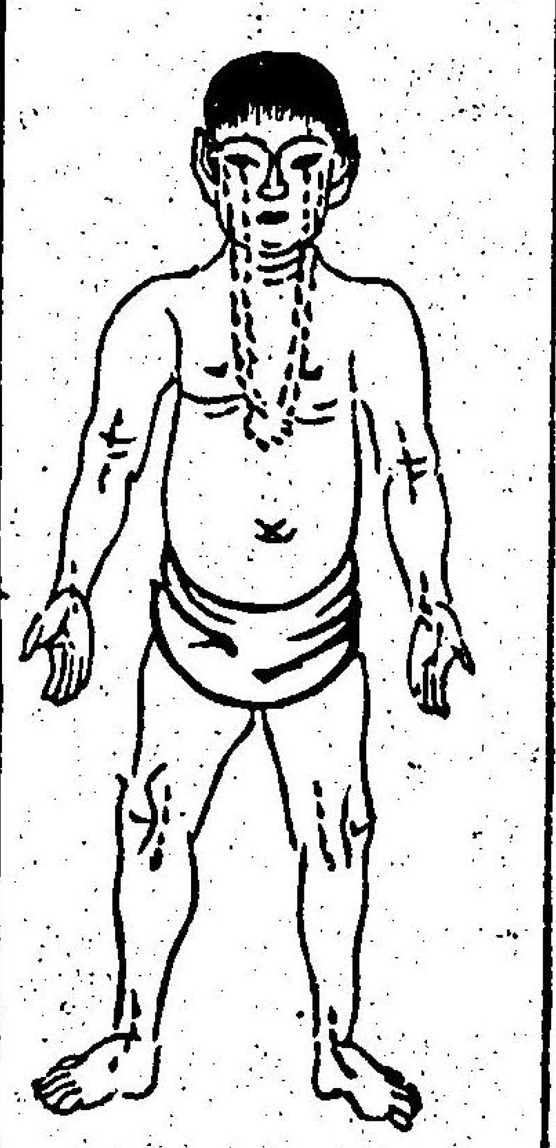
兌後通氣

兌を口とし肺の臓とし西の方に大小竈戸炬燵などに至る迄何れも土上に築立ありて焼土と成る備あれハ此火氣人躰の後より肺臓に通して蟀谷頭痛を煩ふ陽遁の氣候に至れバ点の如く昇りて口中荒る庚の火氣あれバ右の方虫歯痛み辛の方に火氣あれバ左り痛み陰遁の節頃に至れハ五月より下りて淋病消渇となる腐敗物の備へあれバ婦人ハ白血下る事あるなり



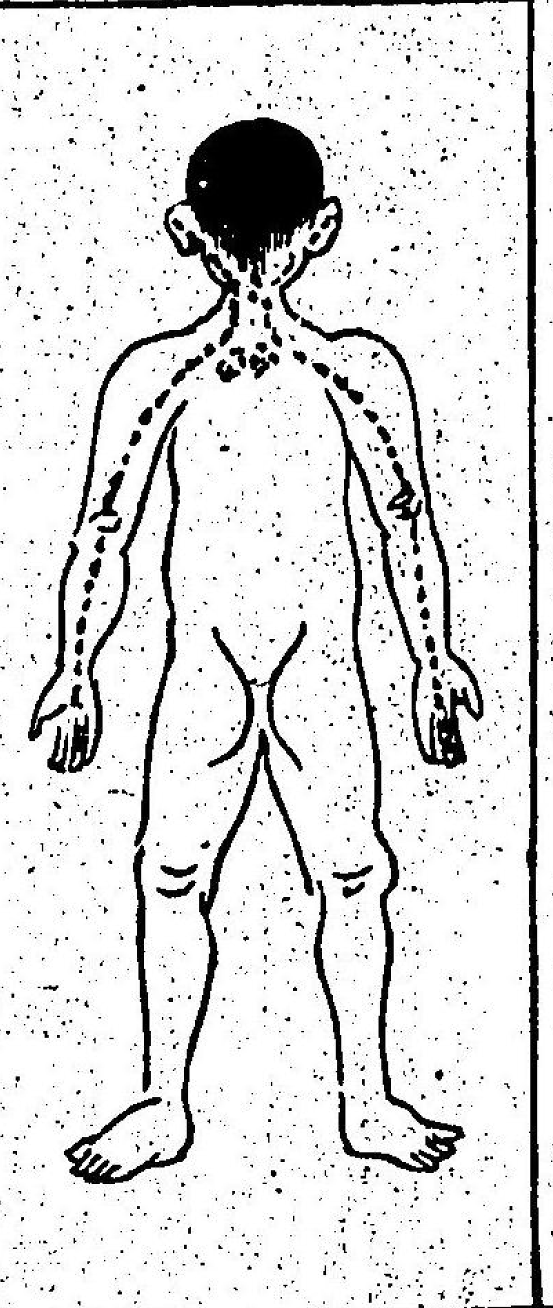
離前通氣

離を目とし心の臓とし南の正當に井泉あれバ眼病絶へず夏五月の節に至り此水気離の火と水剋火なるを以て眼まぜ風眼と成る丙に寄れバ左眼に通して痛み丁へ寄れバ右眼潰るなり南の火氣ハ心に通して昇り耳鳴星点の如く通するが故聾と成なり水火共午の方に大凶にして乱心狂気痛風酒乱等皆此水火の氣心の臓に通ずるが故発するなり



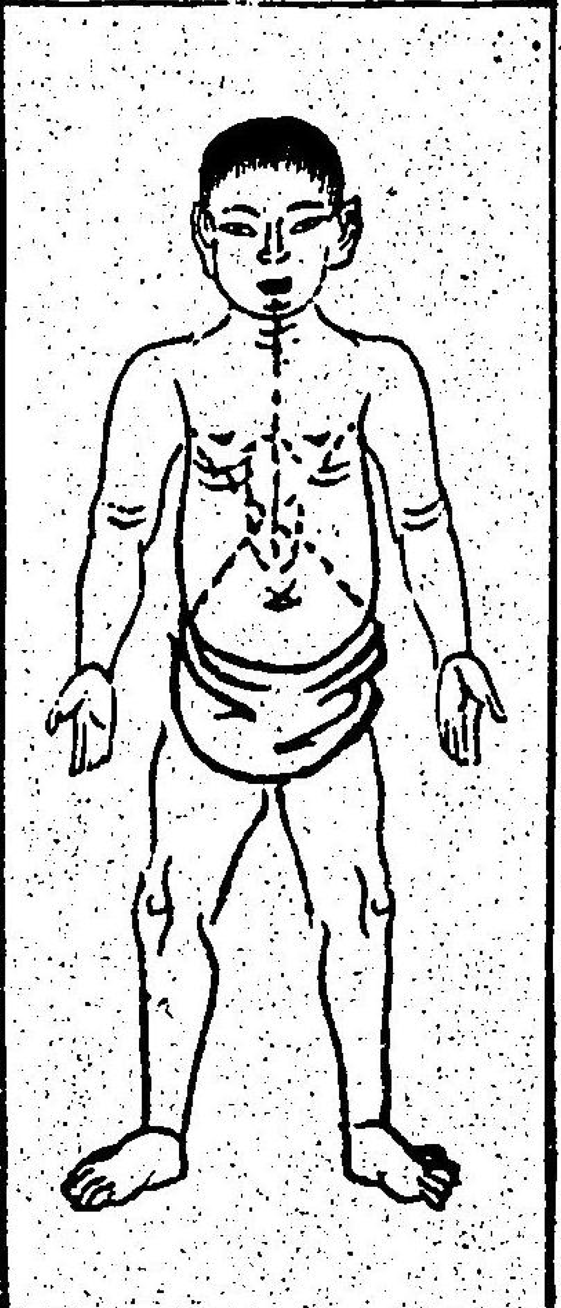
坎後通氣

坎を耳とし腎の臓とす北ハ井泉なれハ脊筋に水気通する故年内風邪絶へず終にハ中風と成か又人躰引縮て自由叶ハず又冬十一月節に至て眼病底火を煩ふ子は正當。不浄物并に腐敗木等の備なれバ肩脊痛て終にハ腫物と成あり壬に寄れハ右に通じ癸に寄れハ左リ痛て又ハ癆症、張満、盲目と成あり又聤及び吹出等崩発して遂に腫物と成あり



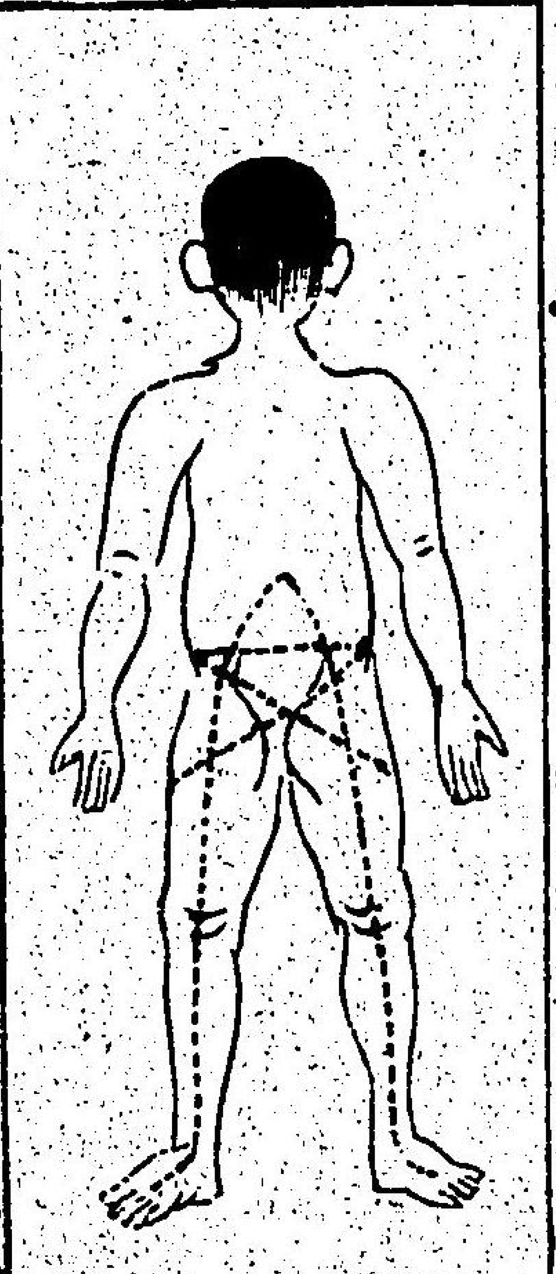
坤前通氣

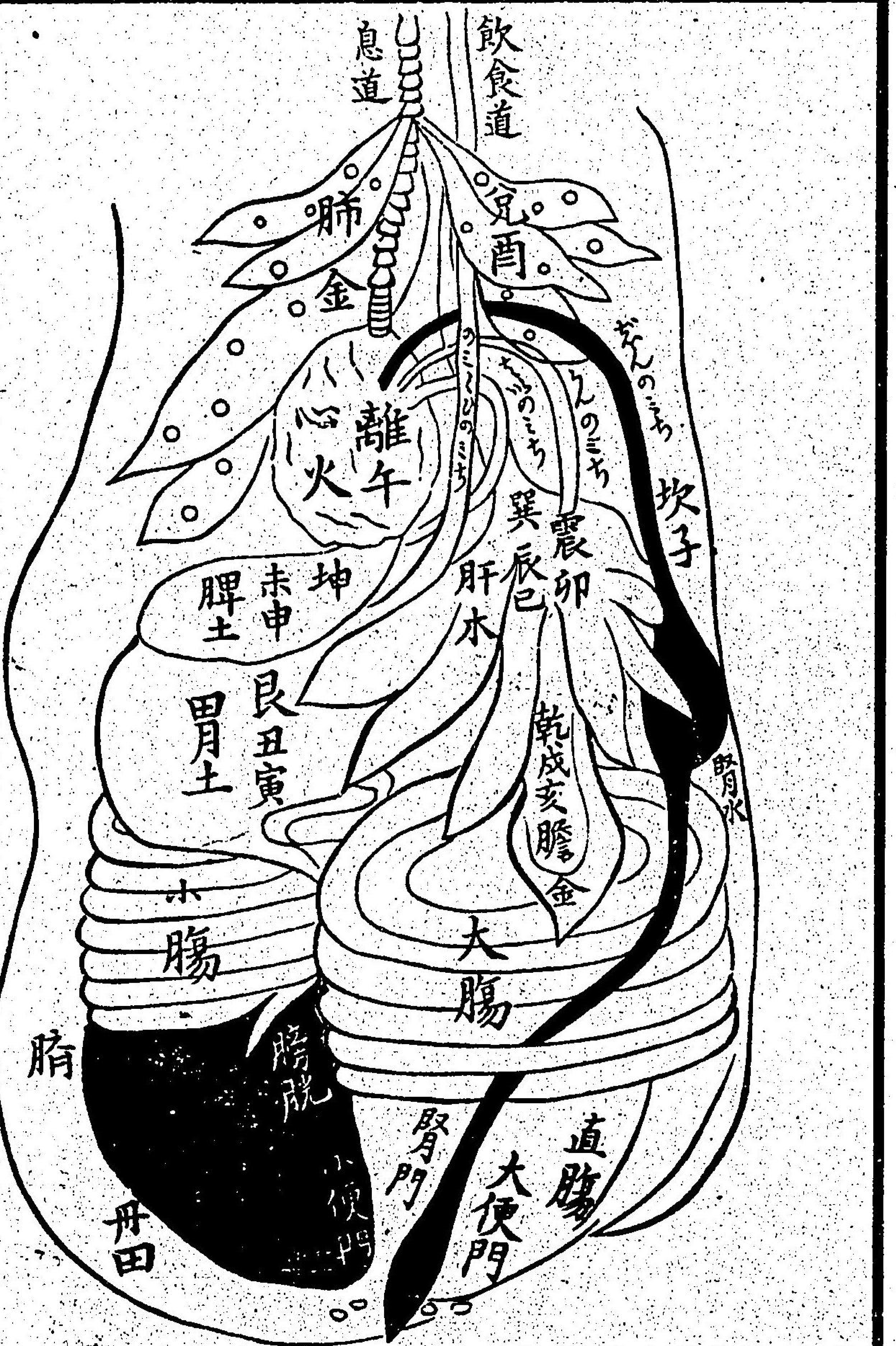
坤を腹とし脾は臓とす坤に水気の備有るは又ハ不浄物の備なれバ夏六七月の節に至て流行病を煩ふなり平常溜飲、癪、胸腹痛、食傷、下り腹、結痢となる又ハ乳痤り乳汁出ずして腫物を発す未の方の腐敗物ハ左りを申は方ハ右を煩ふ土剋水の逆気通して終にハ黄胖胃病と成胸腹に水気停滞して味噌汁を嫌ひ煎物を好むの大凶なり



艮後通気

艮を腰とし脾の臓とす丑寅の方に井泉有て不浄物又ハ塩噌類あれハ人躰後より下脾胃ニ通して疝気溜飲癪痞絶へず痰咳を煩ふ丑の方ニ水気備りあれハ右ニ通し寅の方水瀝の備あれハ左りの下腹より腰部ニ痛ミ股筋引釣り夜寐ずして心労し終ニハ疫病傷寒と成り生命を夫ニ至る又小児ハ驚風ニて引付け血脈断絶ニ及ぶの大凶なり





右解剖の畐ハ五臓六符へ支干五行の氣の通するを見せん為爰ニ図を設る者なり夫病疾ハ五臓より損傷より生し鍼灸薬餌を以て治を施すといへとも治せさるハ所謂天地間の五行逆気通して種々ニ病根を醸し終ニハ持病と成も是れ即ち人躰中五行の疑気ふれバあり夫人の五臓たるや肺金膽金の方に火氣通せれバ頭痛と成り心火ハ水火の気通せれバ眼病と成又ハ癇逆上を煩ふ肝木ハ方ハ腐り木及ひ不浄の気通せれハ手足痛ミ腎水の方ハ水火の気通せれバ眼病底火癇風邪中風と成る脾土ハ水気并ニ不浄の気通せれバ脚疾、疝気、又ハ疝癪腰痛ミ婦人ハ長血下り身熱と成て失命ニ至る是逆気をして改轉し順ニ帰せしむる時ハ病根治せさる支なし

八宅明鏡墨字凶所の説

凶ハ絶命を以て第一とし次ニ五鬼あり禍害六煞ハ少軽しといふ耳然とも此四凶方其位稍同ふして門戸竈口神佛の霊祖什寶の納所等ハ凡て清浄の具を置ことを大ひ禁あり唯陰濕穢物の構を禁ざる也へ竈坐巳下の不浄備りとも決て妨なしといへり

右ハ八宅の専務を述と雖も坤艮の二方に
井厠浴室水流し堀込或ハ水溜坑等あるハ不
浄陰濕の備あるハ本命に拘はらず凶しくして大に
凶相たること予屢述る所なり就中二黒五黄
八白六白七赤等ハ此二方八宅の説に於ても
不浄を禁ずる所ゆへ右命の住宅坤艮等に
陰濕の備あれハ両悪等しく拒みて凶相限なく
く家内寂寞を主とり産業衰微におよひ子
孫断絶するに必せり殊に二黒五黄ハ坤の
方八白ハ艮の方伏位本命宮とする故此二方凶

相の祟咎別して重しとれ深く恐べし又一白九
紫三碧四緑迚も坤艮陰濕の備ハ凶相なりと雖
右四命八宅の説に因てハ此方不浄を禁ぜざる所
ゆへ其祟災稍軽き理あれハ唯一般に論じ難し
勉て此理を考ふべし凡此説ハ是本命に因て聊
軽重ある訳を述る而已にていづれ坤艮或
二方に不浄穢濕の備へあれバ徃々其祟災発
せずといふ事なく種々の災害に罹り終にハ家
断絶におよぶと知べし
前條ハ八宅明鏡第一の説にして茲に考るに日々新に

して又時に新なり此少も違ふてなし正に坤艮は二方に水濕の備あれハ些少ありと虽障らぬと云なふし古より後世に至るまで替らざる説と觀察ハ易経の序に曰く聖人の憂患後世至れりと云べし古へを去ること遠しと虽遺経尚存すと実に此説ハ松浦琴鶴先生の遺経にして其辞深切なりと云べし

水火通氣論

夫水火ハ一日片時も欠べからざる者にして人世貴賤の別なく總て日用第一の根元なり水火なき時ハ生命を保全し難く食餌を調理するに水火を以てせざれハ食し難し又薬を用ゆるも亦然り故に家宅に於て水火の備へに吉凶あるハ至當の事なり其吉凶相生相剋の順を知らずして只調度の便不便にのミ拘泥する時ハ假令ハ吉ら十あれバ凶も亦十有るの形ちと成るなり此理如何といへバ一年に於てハ一寒一暑乾道ハ男坤道ハ女なるにほ一昼夜に於てハ夜ハ陰にして昼ハ陽なり時に於てハ日輪正中の時午の方に位するを見れバ夜中ハ子の時なり世界に於てハ南極と北極とハ

寒帯あり中央部に熱帯あり是日月の行道を考ふる時は必らず十分の内五分は陰五分は陽なり故に南は火にして北は水なり南は中女の方北は中男の方此両気交合して人間陰陽の象物生じ出たるなれば水火の気离る可らず离るべきは道にあらず大天地たる世界の眼は日月なり人間も乃ち小天地にて陰陽の象物男女の備はれり是人体の眼は日月に象るものにて聖人の教有りしは少しも違ふ事なく陰陽開闔昼夜に依り人の眼も昼は開き夜は闔るものなり故に物を見るには

先目を先として手足これに随ひて歩行するを日の出るも東方より行道を即一日の始なり此陽気を受て万物先つ震起するを考ふれば人躰の眼は五臓中の始めなり則心の臓は前にも述ぶる如く離を目とし心とは次を脊骨とする故に南北程大切成る処はなし夫人体の根元は眼中なり先つ眼球発生して頭部に及び脊骨竪立し五臓六腑より脾肉皮爪等に至まで全躰を作せり其れ此を証するは鶏卵を打破して視察するに依り如何となれば眼球先づ其形をなせり是的証にあらずや万物

全根全躰の理を考べし夫れ天ハ父地ハ母あり天の気が受て母の土より生じ魂天に上り魄地に帰る天地の気滞れハ変を生じ人身病根を醸す天運循環して滞らされバ天変生せず人身も随て無病あり此と等しく土地と家宅と人体とハ全根全体にして先此気の通る処の気を受るハ明白に学知し得る処あり其道理の一二をかけて云ハゞ乾の方強張の地宅なれバ父此気を受て強気と成るなり坤の方強張の敷地なれバ母此気を含んで強気と成るなり余皆此に同し其地宅欠

け入る時ハ気の不足と成る爰を以て地宅の欠張曲直吉凶の論説実に凡人の知る処にあらざれバ近時開明に及び電気の作用を発明し種々究理の学上進し水火の気を以て動くの蒸汽あり今日予が発明の病根究理法に於ても病根を治するに水火を利用して其順逆を改正するに在り

世界ハ広し万国ハ多しといへども人民の生活する情况に於てハ何ぞ別あらんや五大洲中或ハ米穀を食とし或ハ肉喰を先とし天地の気候寒暖のちがひあるより気を受るひとしからざれバ人種の

一様ありて身体の長短形容或は色の黄白替りありと
雖両眼あり四肢を備へ十指を具し五臓六府を備るに
至りては別に異る事なし故に風水の学本邦人に
功験を与ふれは他邦人にも適用して可なるは論を
待たざるなり因て此学は天下公供の学なり古へ
の聖人南極と北極とを観察し河図洛書より天
運及び飛宮星の法を定むるといへども中古安部
清明より伝り神谷古暦松浦東鶏に及び近代に
至りては松浦琴鶴先生著に知の方鑑九星法并
に家相教授の載籍牛に汗し五車に満るといへど

も今の活物究理の世に至りては空論多くして
全く病根を的中する程の理を究むる事難し其
証拠とするは一二を挙げて証せんに前にも述る
如く南の正当に井泉有れば年々五月の節に至り
眼病を煩ふ北の正当に井戸水気あれば年々十
一月の節に至り眼病を煩ふと記載せしのみに
て左右何れの目を煩ふといふ事を記せず只九
星飛宮の順逆と五凶六殺のあるる方を普請すれ
ば災害病難の事あるを記したりといへども持病
などに至りては更に見出したる工夫もなければ

隔靴痛痒の患なき能はず明治以来陽暦に改まりしに記載せり日月火水木金土を以てす皆此気に感して生せさるものはなし此理を根元として天下も治るなり其内水火は日月とひとしく片時も動かざるはなし是火は空気の根元なり依て此術を風水の術とはいふなり古人曰く天地の間に動くもの二つあり風と水なりと記し有り能く調へ得たりといへとも気の通して人躰病根となる程の事は記さば遺憾と云べし夫れ世界は日月を以て元とし家宅に於ては水火を

以て元とする五行の気二ツを欠とも食する事能はねど雖其内且つ動き且つ働くは水火の二ツにあり此気能く通して病根を醸し又は無病長久を保つの元を分析究理して世間の助と成さんことを思ふなり見よ如何なる大厦小屋と雖水火を用ひざるはなしされは一日も早く学知し得たらん人は一家無病に成のみならず天地の恩沢を受け家冨と子孫繁昌するを正に風水の究理に依れり一家是を用ゆれば一家の幸福を増進し一村なれば一村の益あり一国正にすれば一国の利益を得るなり万国此法を以て改

正をれハ天下泰平国家安全にして禍乱生せん予
ハ常ニ小利を積て大利ニ至らんを願ふもの
なり聊か筆を採て以て後の聖賢を待次

五行相生　相剋

水生木　木生火　水剋火　火剋金

火生土　土生金　金剋木　木剋土

金生水　土剋水

此相生相剋ハ地理風水順逆を知るの九々とも云べ
きなり病の根元を知らんと欲せハ日々刻々昼夜
となく心ニ諳誦せざらんハ有べからず

九星法ハ

五黄、六白　七赤　八白　九紫　一白　二黒　三碧
四緑　なり

一白ハ坎の水　強勢の水獨星なり

二黒ハ坤の土　平地の土なり

三碧ハ震の木　早春芽出しの木なり

四緑ハ巽の木　晩秋の木なり

五黄ハ中央の土　家宅敷地の土なり

六白ハ乾の金　土中より掘出したる荒金なり

七赤ハ兌の金　火を以て錬たる金なり

八白ハ艮の土　山の土なり、
九紫ハ離の火　強勢の火独星なり
中八方ハ　中乾兌艮離坎坤震巽
十干ハ　甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
十二支ハ　子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、

寒帯熱帯ハ

乾巽を極熱帯とし　兌震を中熱帯とし
坤艮を極寒帯とし　坎離を中寒帯とし

右寒熱厚薄を明らかにせんにハ冬至の節ハ巽より日の出る光線乾の方に通じ是を乾元亨利貞

と云に当れり是乾を首とし父とし極熱帯とし[illegible]らかるへし我著き知の人体寒を見て知るへし坤に入る日艮の方に止りて夜陰に至る此を極寒帯としとらるへし少男先寒帯より芽出し万物終りて始まるハ艮より盛んなるハなし人躰に取りてハ艮を腰とし腰ハ全体中の冷る処なり故に腰巻を巻き衣類ハ寒暑の区別によりて厚薄有るとハいへとも必す衣服を着用して後帯を巻くも腰部即艮位を煖むるの理なり夫れに反して額より頭部手足の先ハ常に顕し感せさるハ是寒熱の

論自然人身上に備るなり深く考ふべし又水火
の気身体に通して気分の好悪ハ人の知る処なり
先つ頭を冷して腰と腹とを煖かにするときハ
自から手足迄行とゞき身体強壮にして無病なり
然る時ハ万人病生せず繁昌して古より頭寒足熱と云
て北の水の方に枕を成し南の火の方に足を成して寝
ることを法として教ふる所なり又醫師の法に極て大病
と成りて熱の盛んに頭部に昇りたる時ハ水又ハ氷
にて冷し足にハ芥子を塗り熱を足へ呼ふの法なり
昔より漢医洋医も同様の法あり我先つ病家に至

る時ハ即時に乾兌の焼土を取り去り坤艮の水気塩
気を熱帯の方へ轉じ此土の上に火を焚き暖ることを専
一とす然る時ハ病根治せずといふことなし故に平常
頭寒足熱の法を用ひることを肝要なり然れども西北
正当の水気ハ肺熱と成りて吐血することあり成べく
辛より乾に寄れバ水気最吉相とハすることあり肺臓
ハ火金両音に備る深傳あることを大切なるべし

順逆通論辨

冬の夜のさむきにも頭部を出し足より腰を炬燵に
煖め身体を肩脊より夜具等を着し寝るハ頭寒

ま又是に及して頭部をふとんに入れ腰足を出して寐る時ハ僅の時間もたへがたし人其痴を笑ハざるハなし又曰く冬日如何に寒烈なりとも頭を包みてハ居るまじ又夏日炎熱なりとも濡れ襦袢ぬれ腰巻にてハ暮せまじ又曰く目皆又ハ陰部へ塩気を塗までハいねらるまじなど此三ツの理ハ何人も堪へがたきものと云べし是ハ乾の火気土中に付あれバ年中頭を包み火燵へ頭を入て寐たると同し又北より艮の水気ハ肩脊より腰迄に通し即ち濕たる襦袢腰巻を用ひたると同し又鬼門に味噌漬物都て塩気類を置く時ハ腰に通して陰部にぬりたる塩気の如し南の正当に塩気物あれハ目にしみむ事目眦へ付たる塩気にひとし故に乾位に炬燵あらバ焼土を五六寸も堀取りて其跡へ清土を吉方より取来て入替置き二階炬燵と同様に箱入にしてつり置時ハ直に頭痛全快する事妙あり又水気塩気の備ありたるをハ熱帯の方へ徐々に転し替へ其跡の土を是も五六寸堀取吉方の清土を入替へ其跡にて火をたくときハ濡れ襦袢ぬれ腰巻を脱し乾燥せる衣服を着たると同し前条の如く補助すれは脾の熱散して服

痛又ハ嗽咳等直に全快さるゝて朝暾に照されて霜の
解るゝ如し前文の如くなる故に坤艮の水気ハ露斗りも
置べからず病災絶へざるハ陰地に水気の備ある故なり
又坤艮土の部に火気を備るときハ無病にして命長
し乾兌の方にハ土中に少しの焼土たりとも置べからず
病症絶へずして短命なり乾兌の二方ハ土中の火気
を能く取去り水気の備へあるときハ無病にして
命長し此理を知らずハゆるべからず我行ふ所ある水
火の逆気を吉方へ回転して病気全快に及びたる
人ハ数多き中に信州大草町の酒舗主人并に其舅

共に狂人と成たるを南方の大竈を巽方へ移し宿
痾全快しけり其功に感し男良一郎入門したるなり
又同国山吹村庁桐手早米妻左りの下腹に痼り永年医
薬の功も見へざるを寅の方の浴室并に便所の溜桶を
掘取り乙の方へ転しけるなり忽ち腹の痼り散して平愈せ
又南の正当に水気有て眼病絶へざるを巽の方へ転しけ
彼の風眼にして眼中へ目星の出来たるも全快し又北の方に
井戸水并に水流し水桶等の備有て十一月節に至り底
火眼病となり又ハ風邪年中引続き終にハ中風と成る其
根元を窺むるて甚だ易し是ハ北方の水気を乾の方へ

轉じて病根全治す斯くして実功を得し人甚だ多し又艮位に味噌塩気の備有りて其気通じて腰痛し瘤痔吹出等出づるも巽東乾西等の熱帯の方へ轉じて其跡へ土を入れ替へ塩気を取去り病気全快に及びたる人其数算ふべからず又曰く医道に片頭痛病とて半片つて疾痛さすると心痛並に腹痛の甚しきに至りては医も亦治療及ばずと記し有りといへども夫れは世の開明ならざる時にして今万病の根元を発明するに至りては如何なるも拙き説と思はるるならば如何程に縷述するも同じ事なり医も及ばずと云事に付て爰に記する所は乾に大に竈築き有れば真頭

痛眩暈立暗の病症となり戌の方土中に炬燵成りとも築有れバ右の方片頭痛と成り亥の方に火気有れハ左り片頭痛と成なり又ハ兌の方に土中の焼土と成火気の備有れば蟀谷頭痛と成なり是肺の臓に熱付が故なり庚の火気ハ右蟀谷片頭痛又辛の方に火気備有ハ左り蟀谷片頭痛と成なり是も数万の人を全快されるハ火燵なれバ焼土を堀取り清土を入替へ炬燵ハ箱入にして土に付けざる時ハ病全快し大竈ハ坤艮の部分へ築替へ焼土を能々堀取り清土を入替へ片頭痛脳病直に全快に及びたるハ幾万人なるを知るべからず又癩病を煩ふ

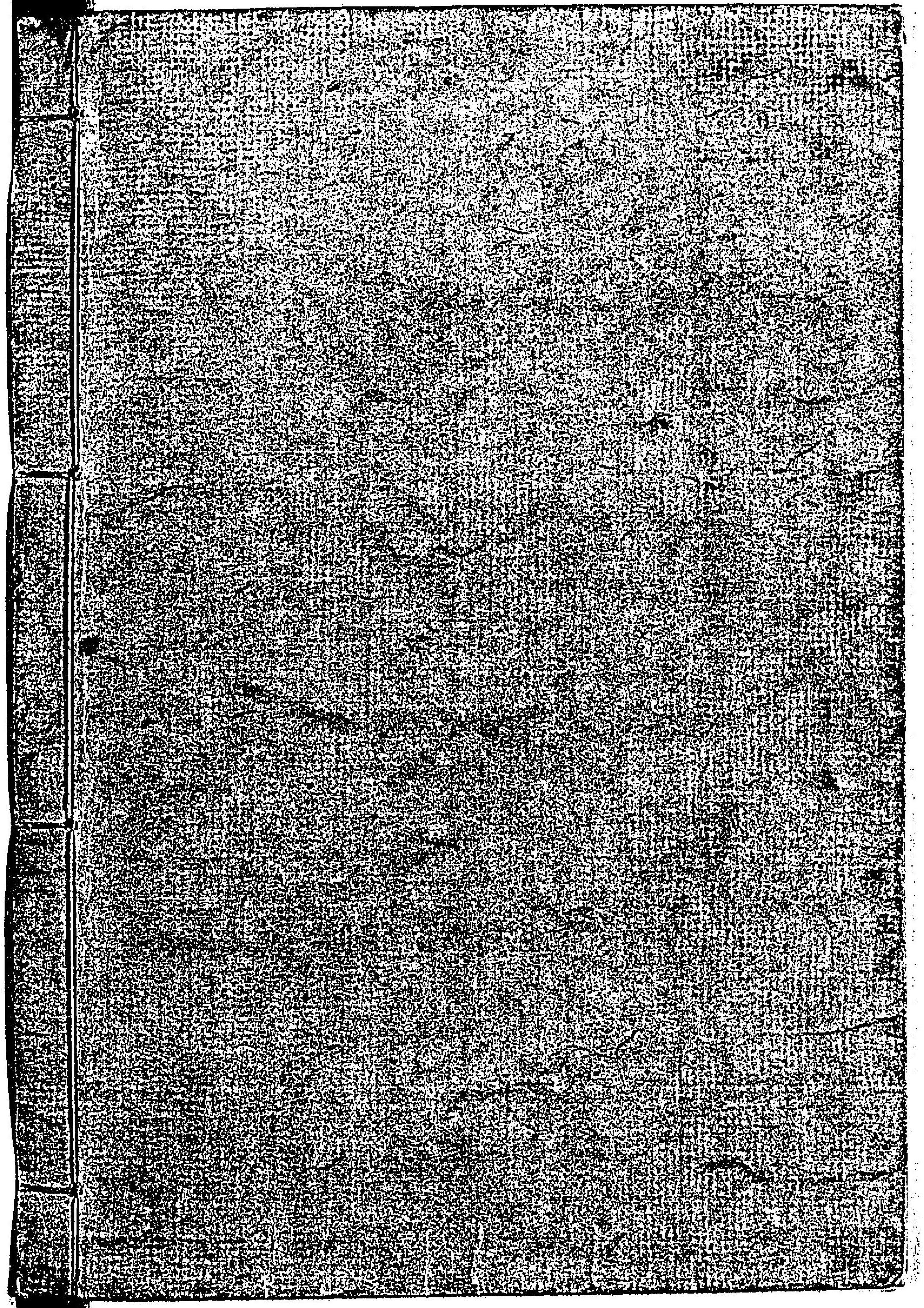
ハ赤土山より涌出る臭気ある濁水を飲用する土地に多し凡て赤土場とハ見へざるも何れも癩病を煩ふ人のあるハ水の難あり此理を能々考へ癖のなき清水を飲用に供すべし水の清濁を改めて病根全快に及ひしる人甚だ多し其証とするハ西に呑水あつて障れハ婦女子癩病となり東にあつて障るときハ男子病気と成にて是西ハ少女東ハ長男の方に当れハなり東ハ太陽の昇る方にして長男なり又西ハ日の没する方にして夜陰に至る此気を受るハ女子とされハなり

耶蘇教に對し万病発端問答

明治十七年十月東京芝區久保町耶蘇教會に至て説教畢るの時予宣教師に問て曰くイエスキリスト聖人の行ひによりて廿八ケ年以前より盲目となりたるをイエスの指にて両眼を開き直に平愈したりと云ひ其他諸病の愈たるハ珍らしき廣徳なれども眼病の原由を請ひ問ふ且つ眼病も種々有れども其内甚しきハ風眼にして眼球破烈し又底火となく潰れたるもあり是何故風眼と成り底火となり又ハ左右の病根何の理より発するか教師答て曰く病根原由ハ予も知らずと云ふ時に琴生又問て曰くさるらバ治療の法を問ふと教師曰

く夫も聖人にあらさる上ハ行ふを難し我輩にをハ其原
由治療総て知るを能はずと答ふ予曰く夫ハ漠然たる
答あり我皇国に於てハ万病根切究理の法を発明し病
根の左右とも知れと云をなし且又治法も完備せり
意いふハ傳ふべしとて立別れたりかくいふる上ハ万国ま
でも病根発端原由ハ知れさるものあり我行ふ所の方病
根切究理ハ皇国の新発明と云も不可なきなり

地理風水　萬病根切窮理　乾之巻畢



萬病根切窮理　乾

特38
290

013492－001－6

特38－290

万病根切窮理（地理風水）

松浦　琴生／著

1冊（乾21丁）
M22

AAK－0970